

○少年院・実景

○同・レクリエーションルーム

坊主頭の少年たち、制服姿の職員たちが、テレビを見つめている。

突然の地震！

パニックに陥る少年たちと職員。

テレビからは、地震と大津波に関する緊急ニュースが流れます。（※この映画の中における『震災』はあくまで架空の事態であり、故にこういったニュース素材に関しても新たに状況を設定して創作することが前提である。よって、今回のシナリオ上に『テレビ報道』が表記された場合、それは視覚的なものではなく音声のみの表現となる）

テレビが受信不能となる。

鳴り響く緊急サイレン。

○山中を

三人の少年が逃げるように走っている。

内田圭（19）、佐伯朝雄（19）、森優樹（19）。  
各々の衣服は泥に塗れている。

○ビニールハウス（深夜）

忍び込んだ三人が栽培中の苺にむしゃぶりついている。

○XX造形芸術大学・アートクリエイト学科・研究室

数人の教職員が呆然とテレビを見つめている。

テレビから流れている緊急ニュースの音声以外には何も聞こえない。（原発の2号機、3号機爆発）

テレビ画面を凝視している男、柳田周（71）。

### ○街の片隅

人目につかない一角、道に面した路地の角に身を潜めるように立っている朝雄と優樹。

通りかかる若者二人にいきなり襲いかかる朝雄と優樹、そのまま路地の裏手の空間に連れ込む。

固まる若者二人。その背後を塞ぐように、圭が現れる。

圭と朝雄は坊主頭、優樹は中途半端なスポーツ刈り。

朝雄「…（にこにこ笑いながら若者たちに）びっくりした？」

若者A「…（びくつきながら首をカクカクと上下に）」

朝雄「つてか実はね、ボクら漫才やってるんで、ちょっとそれ見て欲しいんですよ。時間とか大丈夫？」

若者A「…（さっきと同様にカクカクと首を上下に）」

朝雄「（優樹と目を見合わせ）…」

朝雄と優樹で漫才を始める。ネタも面白く二人の息もピッタリで、若者たちの表情があつという間に緩み、笑いが弾ける。      オチで締めた瞬間

拍手喝采の若者たち…に飛び掛かる朝雄、優樹、圭。

若者たちを叩きのめして携帯と財布を取り上げ、服を剥ぎ取って着替えていく。すぐに奪った携帯に番号を打ち込んでいく朝雄と圭。

朝雄「…あ、久保田くんっすか、朝雄です…あ、いやちょっと早めに出てきちゃったんすけどお…」

圭の電話は、相手が出ないよう。

### ○X X造形芸術大学・教室

広いアトリエのような教室。授業中。10数人の学生がそれぞれにオブジェ制作をしている。

柳田がその間を歩きながら短い批評を加えていく。

他の学生に対する批評を冷やかな笑みを浮かべて聞きながら自分の制作に向かい合っている女子学生、村上桜（20）。その前に静かに柳田が立つ。顔を上げ柳田を見る桜、笑いが消える。柳田が桜のオブジェを手に取り、そのまま床に落とす。砕け散るオブジェ。

桜「…」

教室中が息を詰める。

柳田、表情を変えずに教室を出て行く。

その後ろ姿を凝視めたまま動かない桜。

誰も桜に近づこうとしない。「…やるなあ」「チヨーわがまま同士の激突：」「しっ」といった囁きや薄笑いが片隅から聞こえてきて。

○走る電車

やや混んでいる車内。

優先席の前に立つ柳田。そこには学生風の若い男女が座って携帯のゲームなどを楽しんでいる。

いきなり声を上げてその若者たちを罵倒し始める柳田。反抗的な態度の男を女がなだめるように2人が席を立つ。

そこに座って、目を閉じる柳田。

○街・弁当屋

柳田が店頭で注文の来るのを待っている。

奥から店員の若い女が現れ、手にしていた品物を笑顔で手渡す。その女は、各務いつか（21）。

いつか「どうもお待たせしました。毎度ありがとうございます」  
黙ったままそれを受け取ると、立ち去る柳田。

いつか「ありがとうございました」

レジを閉めようとして、ふ、と中の札束に目を留め

る。

いつか「…」

動きが止まっている。

奥から見ていた店長の佐々木浩介（31）が声をかける。

佐々木「大丈夫？」

いつか「…え？」

佐々木「いや」

いつか「え」

佐々木「あ、いや…（笑う）」

レジを閉めるいつか。

佐々木「ライス、セットしてもらえます」

いつか「（笑顔で）はい」

重い米袋を持ち上げ、大きな釜に米を入れると冷たい水で洗っていくいつか。その額に汗。

佐々木「それ終わったら上がっちゃってください。時間なんでいつか「はい」

振り向くと、二人分の弁当を入れたビニール袋をこっちに差し出すようしながら、佐々木が微笑んでいて。

いつか「（ちよつと頭を下げ）…」

再び作業に戻る。

○住宅街の一角・柳田の家

弁当の入ったビニール袋を提げ歩く柳田。一軒家の前で立ち止まり、ポケットから鍵束を取り出す。古ぼけた平屋、或いは倉庫のようにも見える建物。いくつもの鍵を開け終える柳田。息を整えるようにやや動きを止め、一気に扉を開けて中に入る。

○同・中

柳田はビニール袋をテーブルの上に置くとガスコン

口に火をつけ湯を沸かし始める。  
そこは「生活空間」というよりは柳田の「アトリエ」  
なのだろう。作業台として使っているらしい大きな  
テーブルを覆った布には画材の汚れが染みつき、そ  
ここに作りかけのオブジェや完成された作品が置  
かれてある。隅には粗末な簡易ベッド。  
しかし、乱雑な印象はなく、それなりの秩序がその  
空間を埋めている。生活用品は最低限のものしか  
ない。心地よい居住空間ではなく、厳しい自己抑制を  
伴った、表現のための空間。

さまざまな本を収めている棚に並んだ過去の個展の  
図録や何冊もの『柳田周作品集』。

壁に貼られた、新しい個展のポスター。場所は東京、  
日付は1か月後を示している。その脇のカレンダー  
には細々と几帳面な文字で予定が書き込まれていて。  
薬缶から上がる湯気に手をかざしていた柳田が口を  
押えてシンクに顔を伏せる。軽い嘔吐。

歯茎を指で押すとその指に付着するどす黒い血。  
なんでもないことのように手近にあった布でそれを  
拭き取り、奥のドアへと向かう。

施錠されていたそのドアを開けると、そこには厚手  
のビニールで何重もの壁のようなものが設置されて  
ある。脇のロッカーから白い防護服を取り出して着  
替える柳田。

お茶を淹れ、カップを手にした防護服の柳田がビニ  
ールの壁の奥に進む。

そこにある作業台の上に置かれた、クリスタルの輝  
きを放つ奇妙な形のオブジェ。

その前に座り、工具を取り出すと制作作業を開始す  
る柳田。

いつかがひとりで、ウーロンハイなどを飲みながら歌っている。

傍らには1人分だけ開けられた弁当。それをつまみながら。

携帯電話が受信している。

〇とあるマンションの地下駐車場

隅の薄暗がりに停められた高級車の脇に立っている朝雄たち三人。

車の助手席に座ったままの男、久保田（23）から三台の新しい携帯を渡される。頭を下げる三人。

久保田は、朝雄たちが奪った携帯を受け取り後部座席に投げ込みながら、

久保田「働くんだったら斉藤んどこに行けよ。電話しといてやるから」

朝雄「新しい携帯をいじりながら）斉藤クンって今なにしてんできたっけ」

久保田「交通警備の会社。工事とかの脇で車止めたり流したりするヤツな。あいつんどこは社宅完備っーかアパートもあるし」

朝雄「おすおす」

久保田「おすおすじゃねえよ朝雄。（優樹を指し）そっちのどー一緒にか」

朝雄「つてか、ツルんでるとヤバいし、とりあえず俺一人で」

優樹「（不安げに朝雄を見て）…」

久保田「…（優樹の髪形を見て）お前、ひよっとして出所間近とかだったんじゃないの？」

優樹「…（頷き）」

久保田「…バカじゃねえの。（優樹から圭へと目を移し）そっちは」朝雄「こいつは、手っ取り早く金になる仕事欲しいんですけど

…こう見えて荒っぽいことも、な、な、なっ」

圭「…」

久保田「…（しばらく圭を見、後部座席をこなす）」

車の後部座席に乗り込む圭。  
車が発進しようとする。

朝雄「久保田くん」

車が止まる。助手席から腕を出し1万円札を2枚差し出す久保田。

久保田「…また連絡するわ」

朝雄「前言った芸能プロダクションのほうもよろしくです。俺ら漫才で頑張るんで」

久保田軽く片手を挙げ、車が発進する。

朝雄「久保田くん！」

走り去る車。

朝雄「(腰を深く折り) あざーす！」

○柳田の家

奥の作業場で防護服に身を包み、制作に没頭している柳田。

蓄積被曝の影響があらわれている(※要取材)。

○XX造形芸術大学・教室

桜が、何もない作業台の前に座っている。他にそれぞれに自分の制作に手を入れたりしている10人程の学生がいるところに、2、3人の別の学生がやってきて：「柳田臨時休講だって」「マジ」「なんだよそれ」…などということになり、学生たちが声を掛け合いながら私物を持って部屋を出て行く。誰も声をかけずに、ひとり、残る桜。

○同・屋上庭園のような一角

ベンチが設えられていて。そこに座っている柳田と美術出版社の女性記者。ICレコーダーで録音しな

がら時折カメラで柳田を撮る。

記者「これまでの先生の個展には全て、非常に攻撃的で、ある種の犯罪性をも連想させるようなタイトルが必ず設定されていて、その言葉がまた我々を挑発し刺激し、作品を拝見する際に想像力を掻き立てられたということがありました。なのに今回のタイトルは『オーバー ザ インボ―』。これは」

柳田「私は…」

記者「はい」

柳田「…世界は…もうすぐ終わる」

記者「…恐縮です。どういう意味でしょうか」

桜が現れ

桜「私の作品を壊した訳を教えてください」

柳田「…作品…あれが作品か。いい気になるな。お前は何かをわかってる気になってる。だから人の作品を観て冷たく笑う。俺はそんなお前の笑いに虫唾が走る」

桜「…先生、私、皆勤で出席なんですけど又落とすんですか」

柳田「お前は単位とるためにモノ創ってるのか」

少し咳き込む。口元を拭うときに、口内に滲んだ血が見える。

桜「(柳田の口を指し) 血」

柳田「ん」

桜「血」

柳田、口を押さええよると立ち去る。

記者「先生」

桜「……」

○トイレ

柳田がうがいをする。何度も。

○街・玩具屋

朝雄が、商品を手にした店員と話している。



朝雄「だから予算は2万円だ、つってんじゃん。それじゃ2万円ならないじゃん」

店員「申し訳ございません、(別の商品を指し)ではあとこれなんかはいかがでございますよう」

朝雄「それじゃ2万超すだろ。つてか生まれたばっかの子どもにそれムリじゃね」

店員「ですよ、少々お待ちくださいませ」

傍で優樹が二人のやり取りをネタ帳にメモしている。

朝雄「(包装していた別の店員にちよつとそれもつと丁寧に包んでくんね。あ、つてかりボンやっぱピンクじゃなくて緑にしようかな、男か女かわかんないし。希望的には女なんだけどさ(笑う)緑だと無難だよ。でもない？」

#### ○未夢のアパート・表

物陰に潜み、周囲を気にしている朝雄、その傍らに

優樹。優樹は玩具屋の大きな紙袋を抱えていて。

朝雄「…いねえよな、誰も」

優樹「多分」

朝雄「多分じゃねえだろ、つっーの」

優樹から紙袋を奪い、アパートの一室に向かう。従う優樹。

朝雄、あるドアの前に立ち、覗き穴から逆に中を見たりして、一瞬また周囲を見回したのちに満面の笑顔になってドアチャイムを押す。

#### ○同・室内

阿部未夢(19)が小さなテーブルの前に座り、100円ショップで買ったような小さな鏡に向かって化粧をしている。ドアチャイムの音。に続いて、声が聞こえる。

朝雄の声「宅配便です」

未夢「…」

立ち上がり、音を立てないように急いでドアに向かって、除き穴から外を見る。

未夢「…」

脇のキッチンに行き、包丁や果物ナイフなどを取ると別の棚の奥に隠す。  
再びドアチャイムが鳴る。

未夢「…はい」

ドアを、開ける。

朝雄と優樹がいる。

朝雄「おう」

未夢「…かなり早いんじゃない？ 予定より」

朝雄「女の子！…ピンポン！…って、あれ、違う？ 男か（未

夢を押し退けるように中に入りながら）」

未夢「…」

質素だが女の子らしいレイアウト、小ぎれいに片づけられた1DKの狭い部屋。玩具屋の袋を抱えたまま寝室に向かう朝雄、部屋の中を見回して、

朝雄「…あれ？…（未夢を見る）」

未夢「…（キッチンに）お茶とか飲む？」

朝雄「じゃなくて」

優樹も入ってきて、ドアを閉める。

未夢「（優樹に）もしかして脱走？」

優樹「（目を逸らして頷く）…」

朝雄「じゃなくて」

未夢「（朝雄に）今からアタシ、バイトなんだ」

朝雄「じゃなくて！」

未夢「ごめん…流産しちゃった」

朝雄「なにそれ」

未夢「だから手紙も、ずっと出せなかった」

朝雄「…そう」

小さなテーブルの脇に座る。

未夢「…」

優樹「…」

朝雄がいきなりテーブルをひっくり返す。そのあた

りの物を手当たり次第投げると未夢を引きずり回し馬乗りになって、手近にあったハサミを突き付ける。

朝雄「…」

荒い息でハサミを突き付けている朝雄の手が震えている。

優樹「（入り口に立ったまま）…」

未夢「（目を瞑る）…」

朝雄の力が抜け、ハサミを放り投げる。

優樹がそっと部屋を出て行く。

朝雄「ってゆーか…お前は大丈夫なの？」

未夢「…え？」

朝雄「身体とか大丈夫なの？」

未夢「…」

未夢の眼から涙が溢れてくる。

滅茶滅茶になった部屋の中で、嗚咽する未夢を抱き

かかえ、頭と腹を撫でる朝雄。

朝雄「あ…ちよっと一瞬金貸しといてくんね？」

○同・表

入口の脇に座って煙草を喫いながら、小声で漫才のネタを繰り返している優樹。

朝雄が出てくると、手にしていた安っぽいダウンベストを手渡す。

朝雄「あいつのだから小っちゃええかも」

廊下の床で煙草を消し、ベストを着る優樹。

朝雄はさらにポケットから5、6枚の千円札を取り出すと、2枚を優樹に渡す。

朝雄「汚すなっつんだよ」

と、優樹の吸い殻を拾い、歩き出す。追う優樹。

○いつかのアパート（夜）

1DKくらいの狭い部屋。やや乱雑にものが散らか

っ  
て  
い  
て  
。

奥の部屋で、いつかと佐々木がセックスしている。  
激しく動き、果てる佐々木。

手前の部屋のテーブルの下：小さな女の子Ⅱ遥  
(5)がいて、紙にクレヨンで何かを描いている。  
奥の部屋からは小さな笑い声や服を着る音が聞こえ  
てきている。

遥の傍らには、いつかが持ち帰った弁当が半分ほど  
残されている。遥の口元には食べ物の汚れ。

服を着た佐々木がドアの方に向かう。が、途中でポ  
ケットから安い菓子をとり出し、テーブルの下の遥  
に向かって座り込む。

佐々木「(お菓子を差し出し)…」  
手を出さない遥。

佐々木「(笑顔で遥の口元をそっと拭ってやり)こっちに置いとく  
から、あとで食べな」

テーブルの上に菓子を置き、奥の部屋から出てきた  
いつかに声をかける。

佐々木「じゃ明日。お疲れさん」

いつか「(少し笑って頷き)…お疲れ様でした」

出て行く佐々木。

ドアに鍵をかけたいつか、テーブルの上の菓子を床  
に投げつけると、遥の前にしゃがみ込む。

いつか「死ねよ」

絵を描き続けている遥。

いつかが手を伸ばし遥を殴る。

いつか「死んじゃえよお前」

泣きもせず、いつかを見つめる遥。

さらに殴るいつか。

いつか「…」

立ち上がると椅子に座り、そこに放り出してあった  
バッグから携帯電話を取り出す。

煙草に火をつけながら、電源を入れ着信記録に気付  
きコールバック。使われていないというメッセージ。

そのままその番号を消去する。アドレス帳を開く。そこにあるひとつの番号に、電話をかける。相手が出る。

電話の声「もしもし…もしもし」

黙っているいつか。電話が切られる。

いつのまにか、テーブルの下で遙が、床に散らばった佐々木の菓子を食べている。

水道の蛇口から、パッキンが緩んでいるのかゆっくりと、水が滴っていて。

○同（昼間）

ひとりで遙が床に座り、絵を描いている。

傍らには昨夜の弁当がほぼ食べ終えられている。

遙の周りには、描いた絵が何枚も並べられている。

それらは全て、父親かもしれない男の顔。

水道の蛇口からゆっくりと水が滴り。

遙の口元は汚れていて。

○弁当屋

いつかが忙しく働いている。額の汗。

店の電話が鳴り、手を拭きながらいつかが受話器を取る。

いつか「はい、毎度ありがとうございます○○です…あ、はい、

少々お待ちください。（奥に向かって）店長、お宅から

お電話です」

奥から出てくる店長、エプロンを外しポケットから財布や煙草を取り出すと、煙草だけ持っていていつかから受話器を受け取る。

佐々木「ありがとう…もしもし…あ、大丈夫…」

裏手に行って煙草に火をつける佐々木。

作業台の上に置かれたままの佐々木の財布。

いつか「…」

電話しながらへらへらと笑っている佐々木。  
いつかがそつと佐々木の財布から千円札を数枚抜き  
取り、再び仕事を続ける。

○走る電車

車内。座って目を閉じている柳田。  
離れたところでそれを見ている桜。

○バー『GOSPEL』

のエントランスを入っていく柳田。  
やや距離を置いて桜が着く。

○同・中

座っている柳田と、白石健彦（71）。

柳田「俺はあとどれくらいだ？」

白石「（笑って）だから俺は医者じゃないって言ってるだろ」

柳田「…」

白石「…前に言ってた症状は酷くなってる？」

柳田「（頷く）…」

白石「いま一日どのくらいの時間あれと向き合ってるんだ」

柳田「7、8時間。最後の仕上げなんだ」

白石「個展までもたないかもしれない。ただあくまで放射能の専  
門家としての見解だ。またウチの研究室で検査してみ  
るか」

柳田「その時間がもったいないだろう」

白石「他の作品は揃ったのか」

柳田「あとはあれだけだ」

白石「絶対に完成させろ。死ぬまえにな」

柳田「（笑って）…」

○同・表

桜が逡巡している。

○同・中

白石「テロルが惹き起こす結果は大抵自分自身の理想的なイメージネーションを裏切っていく。そのことを想像できる者は結局それを実行しない。だから若者にしかテロはできない。…そんなもんじゃないだろ」

柳田「(酒を含む)…」

白石「迷ってるのか」

柳田「迷いはない。あれは、初めて自分で納得できる柳田周の作品になる」

○道

工事現場の表で、通行人の交通誘導をしている制服姿の朝雄。「急いであれよ！」などと通行人に罵倒され、「申し訳ありません。ご迷惑をお掛けしております」と、何度も頭を下げながら働いている。

○カラオケ屋

エプロンをした優樹が皿洗いなどして働いている。

同僚の店員「あんた簡単な飲み物とか食べ物作れる？」

優樹「ゼンゼン大丈夫です。前に居酒屋の厨房やりましたから」  
同僚の店員「(冷凍パックの袋を投げ)じゃこれ頼むわ。冷凍もんだから袋に適当に書いてあるし。飲み物の分量とか作り方はここね、ここに貼ってあるんで」

優樹「了解です。喜んで」

同僚の店員「喜んではいらないから」

優樹「はい」

そこに、厚手のベンチコートなどを着て大きなスポーツバッグを提げた朝雄が入ってくる。バッグから

は交通誘導の赤色灯が覗いていて。

同僚の店員を押し退けるようにずかずかと優樹に近寄り、

朝雄「休憩時間とかねえの？」

優樹「どうしたのそれ？」

朝雄の坊主刈りの頭には、さらに異様な剃り込みが入っている。

朝雄「よくね？（同僚店員に振り向き）ってかここ休憩時間とか

ないの？ 買ってきたアイス溶けちゃうし」

同僚の店員「あ、（優樹に目を逸らし）いいよ、5分くらい」

朝雄「5分じゃクソしたら終わっちゃうじゃん」

同僚の店員「（朝雄を見ないようにしながら）20分ぐらい？ さ

っきの俺作っとくし」

朝雄「あざーす」

○同・表

寒い中に並んで座り込み、甘そうなアイスを食べている朝雄と優樹。優樹は手にした紙に目を落としてブツブツと呟いていて。

朝雄「軽くやってみつか」

紙には朝雄が考えた漫才ネタが書いてあり、その練習を始める二人。朝雄は既に暗記しており、紙を見ながらツッコむ優樹とでも絶妙の間合いを作り出す。笑える小ネタだが、しかしそれは、かなりブラックな放射能（或いは原発）ネタ。

優樹「いや面白いけどさ、これってヤバくない？」

優樹を見る朝雄。優樹黙る。

弁当が二つ入ったビニール袋を提げたいつかが、店に入っていく。

立ち上がる優樹。

朝雄「もう一個食う？」

優樹「え」

朝雄「（コンビニの袋からもう二個アイスを取り出す）寒いからぜ



ンゼン溶けてねえし。ってか中で甘いもん食えなかった  
じゃん。俺太っちゃうかも」

○同・中

いつかの個室。いつかがひとり、選曲しているところ  
に、飲み物を持った優樹が入ってくる。

優樹「お待たせいたしました。レモンチューハイです」

いつか「…（優樹を見て）あれ、新しいヒト？」

優樹「あ、はい。最近入ったんで」

いつか「…なんか、その中途半端な髪形かわいいね」

優樹「（笑って）あざす。他に」注文は？」

いつか「あとで、また」

優樹「はい、ではまたそちらのボタンをお押し下さい。失礼しま  
す」

いつか「（出て行くこうとする優樹に）いくつ？」

優樹「…は？」

いつか「…いや…いい」

優樹「…失礼します」

笑顔を残して優樹が出て行き、いつかがひとり。

○道に止められたワゴン車

車内。圭を含め10人くらいの若者が息を潜めて後部  
スペースにいて。

助手席の久保田の携帯が震える。

久保田「うん…間違いねえな…（電話を切ると）行くぞ」

後ろの若者たちの中の数人が目出し帽などをかぶる。

ワゴン車を追い越して高級車が止まり、中年の男を  
降ろしてふたたび走り去る。

マンションに向かう男。

男の背後から襲いかかる久保田を先頭にした一団。

その中にいる圭。

○とある部屋

ほとんど何も無いマンションの一室。

鍵が開けられ、久保田を含む4、5人が、目隠しをした黒いスーツの男を連れて入ってくる。その中に圭もいて。

隅に置いてあった椅子に手早く男を縛りつけていく久保田たち。

呆然と見ている圭に近づく久保田。

久保田「(部屋の鍵を手渡し)お前、こいつ見張ってる。絶対に口  
ープほどくんじゃないぞ。クソションベンもこのままさ  
せろ。なんかあったら俺の携帯に電話してこい。俺にか  
ける以外に携帯使うな。余計なところにかけて余計なこと  
喋るんじゃない。全部片ついたら金渡してやるよ。いい  
な」

圭「…(頷く)」

出て行く久保田たち。

残される圭と、鼻と口から血を滴らせた金子。

## ○柳田の家・表

桜が来る。少し入り口の前で家の様子を窺い、やがてドアフォンがないのに気づくと、扉を叩く。

ややあって、扉が開き柳田が現れる。

柳田「…何だ」

桜「…驚かないんですね、私に来ても」

柳田「忙しい。帰れ」

と、扉を閉めようとするのに、

桜「…」

柳田「二度とここには近づくな」

桜の目の前で扉が閉じられる。

桜、去ろうとするが立ち止まり、柳田の家を振り返る。

大きなスポーツバッグを肩から斜め掛けにした朝雄が通りかかる。小さな機械のようなものを手にして、

歩きながらそれをあちらこちらに向けている。

○同・中

奥の作業場で、脱ぎ捨ててある防護服を身につける柳田。目は真っ直ぐに、完成間近の作品を見つめていて。

○同・表

朝雄の手にした機械が音を立てて反応している。それは、柳田の家の、奥の作業場の裏側あたり。充分にはその機械を使いこなせないらしく、朝雄はそれをちょっと振ってみたり、首をひねりながらディスプレイの数字を眺めたりしていて。その様子を見つめる、桜。

○未夢のアパート

未夢が座って、じっと携帯を見つめている。

ドアチャイムが鳴る。

朝雄の声「俺―」

慌てて携帯をテーブルの下に隠すと立ち上がり、ドアを開ける未夢。

朝雄「(入りながら) 4号機どうなってる?」

未夢「は? ヨンゴーキ?」

朝雄「(リモコンでテレビをつけチャンネルをいじる) 4号機だよ 4号機。事故った原発の4号機ヤバイじゃん。この時間 ニュースってやってないんだっけ(テレビを切る)」

未夢「…」

朝雄「ってかさ、(手にしていた機械を見せ) これ何だか知ってる?」

未夢「あのさ、アタシ、バイトですっごい疲れてて今寝てたところ。なんだけど」

朝雄「ガイガーカウンター。事務所にあつたから一瞬借りてきち  
やった。で、ヤバいんだよ、そのへんパトロールしてた  
らさ、その先の、あっちのところでさ、すっげえなんかピ  
ーピー言っちゃってさ。マズイよ、あそこ。今度通報し  
よ」

未夢「なんであんたがそんなことすんの」

朝雄「いや子どものためにはさ、環境よくねえとダメじゃん」

未夢「…」

朝雄「もう一回子ども作んなきゃいけないからさ、お前もあれだ  
よ、ヒバクとかするとヤバいじゃん。母体からうつつち  
やうんだよ」

未夢「…」

朝雄「寝ていいよ。寝ろよ。ってか俺も昼夜両方シフト入れても  
らってんだけどさ。ゼンゼン眠くなんねえんだよな。エ  
ッチしよーか」

未夢「ふざけんなよ」

朝雄「ふざけてねえし。一生懸命働いて金稼ごうとしてるし。っ  
て行くわ。仕事」

ドアに向かう朝雄。

靴を履く朝雄に、

未夢「…ご飯とか…ちゃんと食べてる？」

朝雄「なんか甘いもんばっか食っちゃうんだよな。コンビニのキャ  
ラとしては俺が肥ったほうがいいかもだよな、あいつが  
ちよつとイケメンだから。あ…」

未夢「…なに」

朝雄「電話とか…先生とか警察来たりとかしてね？」

未夢「ないよ。だって知らないでしょアタシのこと」

朝雄「…そうか」

出て行く。

そのまま佇む未夢。

テーブルの下の携帯が鳴る。

取り上げる未夢、着信表示を見て一瞬躊躇うが、出  
る。

未夢「はい」

山口の声「あ、どうも保護司の山口です。いま大丈夫？」  
未夢「はい」

山口の声「やっぱりあれかね、朝雄君、そっちには全然来てないかな？警察も」

未夢「どっちも来てないです。前にも言ったけど、あいつが入る前に別れたから」

山口の声「でもほら、あなたお子さん生まれたじゃない。やはり朝雄君としては会いたいんじゃないかと思うんだよね」

未夢「関係ないと思いますよ。ムカシから漫才のことしか考えてなかったし」

山口の声「そうか：ごめんね、またこっちからも電話してみるけど、なんかあったらすぐに連絡頂戴ね」

未夢「はい」

電話を切る。その待ち受け画面に現れる、生まれて間もない赤ん坊の写真。

○いつかのアパート

いつかが戻ってくる。

部屋中に並べられた、遥の絵。

いつか、それを片っ端から破っていく。

携帯が鳴る。知らない番号だ。

いつか「…」

出ない。

テーブルの下に遥がないのに気づく。

いつか「…」

奥の部屋を覗き、トイレを開ける。

そこにいる遥。

いつか「…」

殴る。無言で遥を殴るいつか。

キッチンの蛇口から、ゆっくりとしたリズムで洩れ滴る水滴。

○とある部屋

椅子に縛り付けられたままの男、金子（44）から離れて圭が床に座り、カップラーメンを啜っている。金子「顔の血、拭いてくれよ。痒くてしょうがねえんだ」

圭、金子を見ると立ち上がり、キッチンの水道でタオルを濡らす。

金子「冷たいじゃんかよ、そのままじゃ。さっきお前、湯沸かしたろ。頼むよ。ついでに温かいもん。日本茶ねえか」

圭、棚を見るがお茶はない。

金子「なきや白湯でいいや」

圭、その辺りにあった紙コップに薬缶から白湯を注ぎ、お湯で濡らしたタオルを絞って金子に近づく。

金子「先に飲ましてくれ」

圭、コップを金子の口元に持っていく。ごくごくと音を立てて金子が白湯を飲む。

金子「…目隠しはもういいだろ。ツラ見られてまずいことでもあんなのか」

圭「黙ってるよ」

紙コップを床に置き、タオルで金子の口元を拭いていく圭。

金子「黙ってる？ 黙ってるってお前、誰に向かってもの言ってるかわかってんのか」

圭「…縛られて動けねえただのオッサン」

金子「（笑って）うまいね。だよな。…痛えよ」

金子の口元にこびり付いた血を丁寧に取っている圭。拭き終わって金子から離れる圭、水道で丁寧にタオルを洗う。

圭は金子に背を向け床に横になると、携帯で電話をかけ始める。

何度も繰り返し、発信履歴を押しては同じ番号にかける圭。

金子「お前昼間っからずーっと電話してんだろ。どこに電話してんだよ」

答えずに目を瞑る圭。

金子「よお、誰だよ。俺が聞いてんだろ。よお」

圭、動かない。

金子「…余計なところに電話してるとあのバカに怒られんぞ」

圭「姉ちゃん」

金子「…姉ちゃん」

圭、床に丸めてあった毛布にくるまり、固く身を縮める。

金子「…」

パッキンが緩んでいるのか、キッチンの蛇口から、ゆっくりとしたリズムで水が滴っていて。

○いつかのアパート（朝）

キッチンのテーブルに上体を投げたまま、目を開けているいつか。服は昨夜のまま。

テーブルの下で丸くなって眠っている遥。

いつかの眼は、自分が破り捨てた遥の絵に向けられていて。

立ち上がるいつか、それらを拾い集め始める。

そしてそれをゴミ袋にまとめて突っ込むと、眠っている遥を起こし、椅子をキッチンシンクのところで持ってきてその上に立たせ、水道を勢いよく出して歯を磨いてやる。

いつか「アーンして。もっとおっきく」

裏側まで丁寧に、時間をかけて…。

○弁当屋

店の裏でいつかが休憩している。ぼおっと何かを考えていて。

佐々木がエプロンを外しながら来て、

佐々木「交代、いい？」

いつか「あ、すみませんでした」

中に入ろうと、

佐々木「大丈夫？」

いつか「え？」

佐々木「いや、なんか……」

いつか「……子ども学校に入れるって、やっぱり住民票とか戸籍謄本とかそういうの全部いるんですよ」

佐々木「……小学校は義務教育だから、住んでるとこの役所からだいたい通知が来て……」

いつか「障害とかあるとやっぱり難しいですよ」

佐々木「……遥ちゃんって生まれたときから……」

いつか「あの日から急に聞こえなくなったみたいで……」

佐々木「あの日？」

いつか「いや……（中に入りかけて留まり）店長、お金貸してもらえませんか？」

佐々木「いいけど……（笑いを浮かべ）あまりたくさんは……」

いつか「いくらなら大丈夫です？」

佐々木「あのさ……ひよっとして逃げてきたとか？ いやほら旦那のDVとか借金とか……そういうのから、なんか……」

いつか「逃げてやり直そうとか思っちゃいけませんか？ 逃げてゼンゼン別の人になりたいとか思っちゃいけませんか？」

佐々木「いや、いけなくは……」

いつか「妊娠したんだけど、って言ったらどうする？ この間だって中出ししたじゃん」

佐々木「あ、いやそれは君が……」

いつか「いくら出してくれる？」

佐々木「あ……いや……（笑いが強張って……）」

店の方から「すみませーん」と客の声。

いつか「はい、すみません今うかがいます……（佐々木に）嘘です。全部」

中に入る。

〇とある部屋



圭が、紙コップを尿瓶替わりにして、縛り付けたままの金子の小便を取ってやっている。音を立てて紙コップの中に注がれる小便。

金子「お前さ、祖父ちゃんの介護とかやったことあんじゃないの」  
圭「身内はいないから」

金子「姉ちゃんがいるだろ」

圭「…」

紙コップの中身をトイレに流しに行く。

金子「どこにいんだよ」

圭「行方不明」

金子「まさか津波でなんて言うなよ。もっとも、半分くらい日本人死にしまったほうがすっきりすんだがな」

口を縛ってあったゴミ袋を開けると紙コップを捨て、再び元のように縛る圭。

キッチンに凭れるように座り込み、金子を見つめる圭。

金子「生きてたらいいな」

圭「…」

ガスコンロにかけていた薬缶が音を立てる。圭、立ち上がる。

金子「姉ちゃん何してたの？」

圭「2つの新しい紙コップに白湯を注ぎながら」結婚して、子どもが一人」

金子「いくつ？」

圭「四つ…五つかな」

金子「ばか、姉ちゃんだよ」

圭が、紙コップを持って金子の傍らに近づく。

圭「…二十一」

金子「若っ…」

圭「施設出てすぐ結婚した」

金子「ちよっと、手だけほどいてくれ。自分で飲むよ。施設って孤児院か。姉弟二人きりなのか」

圭頷き、金子の手を縛っているロープを解いていく。

金子「養護施設育ちなんか珍しくもなんとねえぞ。俺んどこ来

てみ、そういうヤツばっかなんだから。お、すまん」

解放された手で圭から紙コップを受け取り、白湯を飲む。

金子「あぢっ」

と、コップを取り落として口を押さえる。

圭は慌ててタオルを取りに走り、金子の口元に当てようと：その前に目隠しを外した金子の手が伸びて圭の頭を押さえつけ、頭突きが入る。立て続けに。鈍く固い音が響き圭が倒れ込む。

それを見降ろしながら足を縛ったロープを手早く解く金子。一瞬身体をほぐすと、呻いている圭のポケットから携帯を取り出し、番号を押しながらドアへ向かう。

金子「俺だ：今から戻るからよ：え？：だから今から戻るつつてんだよこのタコ！：」

ドアの鍵が外から開けられ、久保田の仲間が数人雪崩れ込んできて金子に掴みかかる。纏れ合って倒れ込む金子に蹴りが入る。頭を抱え腹を折る金子を引きずるように椅子のところまで連れてくると再びそこに縛り付ける男たち。

久保田が携帯を拾い上げ、通話を切る。

仲間の一人が圭の髪を掴んで顔を上げさせる。

久保田「絶対に逃がすなって言ったよな」

呻く圭。

久保田から受け取った携帯を見ながら別の仲間が、別の仲間「お前、これ、どこに電話してんだ」と圭に詰め寄る。

金子「(血塗れの顔で笑って)姉ちゃんだよ。実の姉弟の」

圭「…」

金子「(プツと噴き出し)こいつら姉弟でオマンコしててよ。それで百回も二百回も電話してよ。姉ちゃん、姉ちゃん、つて泣きながらセンサー掻いてたよ」

一同の眼が圭に注がれ、金子の笑いが昂まる。

久保田「(圭に)立て」

圭「…」

久保田「立て！」

よろよろと立ちあがる圭。

久保田「今度逃がすような真似したら、こいつと一緒に前も殺すぞ」

圭「…」

金子「(久保田に) 早ええこと殺っちまわねえとテメエが死ぬぞ。

もう顔も覚えたしな」

久保田、金子の顔面にパンチをぶち込む。

金子の痙攣的な笑いが続いている。

○カラオケ屋・個室

いつかが、携帯をいじっている。保存してある伝言メッセージを、開く。男の音が流れ始める。…「あ、俺です…」…躊躇っているような、不安を押し殺して泣きながら笑っているような…それはいつかの夫…各務泰志(39)の声…「大丈夫かな…どこにいます…だろうね…あの…やっぱり諦めきれないんだよね…絶対君と、遥が…やっぱり…毎日毎日…」…切れる。

優樹「(ドアを開け) 失礼します」

急いで携帯を切るいつか。

優樹「ウーロンハイと、ポテトフライお待たせしました」

いつか「(笑顔で)…どうも」

優樹「いつもお一人なんですわね」

いつか「…」

優樹「あ、すみません。他に…」

いつか「あんたも飲まない？」

優樹「いや、ちょっと」

いつか「だよ。冗談」

優樹「…(出て行くこうとして) 俺、漫才やってて」

いつか「あ…そうなんだ」

優樹「一瞬聞いてもらっていいですか」

いつか「聞かせて聞かせて」

優樹「ホントはコンビニなんで一人でやっても面白くもなんともな

いかもですけど…えー…じゃいきます…」

外の方で「いらっしやいませー！」という大きな声  
が聞こえる。

優樹「あ、すみません、ちょっとお客さん来ちゃったみたいなん  
で。また時間のあるときに」

いつか「…うん」

優樹「また、絶対」

いつか「OK、絶対」

優樹が出て行く。ひとり残る、いつか。

○柳田の家・裏

ピーピーと反応しているガイガーカウンターを手に、  
携帯をかけている朝雄。

朝雄「ってかだからなんでちゃんと調べに来ないわけ？ 意味わ  
かないんだけど。こうやってピーピーピーピー鳴って  
んじゃん…だから俺が誰だかっていいじゃん、なんで…わ  
かったから聞いたからそれはもう…無視かよ、もういい  
よ！」

乱暴に切った携帯を地面に叩きつける。

朝雄「…」

携帯を拾い上げ、立ち去る。

別の一角で、じっとそれを見ていた桜。

○未夢のアパート

未夢がドアを開け、朝雄が入ってくる。

朝雄「携帯壊しちゃった」

と、床に放り投げる。

朝雄「お前の貸してくんね」

未夢「…」

朝雄「それマズいよな、やっぱ。お前のなくなっちゃうじゃん」

未夢「…うん」

朝雄「あの家に火つけちゃおうかな」

未夢「…」

朝雄「いや、火とかつけると警察とかみんな来るじゃん。あの家  
なくなんじゃん」

未夢「(じっと朝雄を見つめ)…なんの、話？」

朝雄「エッチする？」

未夢「…いいけど」

朝雄「希望的には女の子だったんだけど男でもいいや」

未夢「だよね」

朝雄「…仕事行くわ」

未夢「…うん」

ドアに行きかけて立ち止まり、ポケットからクシャ  
クシャになった7、8枚の千円札を取り出し、5枚  
未夢に差し出す。

未夢「…ありがと」

朝雄「ってかちよっとずつだけどそれ貯めといてくんね」

未夢「…うん」

朝雄「将来のためによ(笑う)」  
出て行く。

未夢「…」

### ○柳田の家・表

桜が、じっと入り口を見つめている。

柳田が出てくると扉に鍵を掛け始める。

その動きが、さらに疲労感を帯び緩慢になっていて。

桜「…」

### ○バー『GOSPEL』

桜が入ってくると、真っ直ぐに柳田と白石の座って  
いるテーブルに歩み寄る。

気づく柳田。

桜「いいですか、座っても」

白石「…（桜と柳田を見比べ）」

桜「（白石に）初めまして。柳田先生に美術を教わっている学生で

村上桜と言います」

白石「（微笑み）柳田の友人の白石です。どうぞ」

座る桜。

桜「（静かな声で）先生のお宅の裏でガイガーカウンターが反応して  
ます」

柳田と白石が目を合わせる。

桜「先生は何をやってらっしゃるんですか？ 先生の作品と、ガイガーカウンターと、先生の最近のご様子にどんな関係があるんですか？」

柳田「…」

去る。

桜「…」

白石「僕は放射能の専門家です」

桜「（白石を見る）…」

白石「ガラス固化体ってご存知ですか」

桜「いえ」

白石「放射性物質を保管するために、ガラスのような状態にして封じ込めておく。その技術はまだ未熟とされているんだが僕にとっては完成してる。僕には可能なんだ。ただ僕の技術は認められていない。（笑って）いわゆる原子力ムラから疎外された人間なんでね。僕はそれを、僕が作ったガラス固化体を柳田に提供した。彼はそれで作品を作っています」

桜「…」

白石「（手で球体の形をつくり）封じ込めているけれどもそれは、ちょっととしたショックを与えてやることで一気に飛散する。この間の原発事故など比較にならない」

桜「…」

白石「彼はこれまでもずっと、世界と、闘い続けてきたんだと思います。柳田周は、それを最後まで全うしようとしている」

桜「でも…それって…」

白石「僕がこうやって全てをあなたに語ったのはどういうことだ  
と思います？ あなたの口から誰かにこのことが洩れ  
たと知ったら、そしてそのことによって僕たちの計画が  
失敗したら、僕はあなたを殺してしまおうでしょう」

桜「…」

白石「柳田はもう死にます。おそらく、個展の前に」

○柳田の家・表

桜が来ると、扉を叩く。

ほどなく開き、柳田が現れる。強引に中に入ってい  
く桜。

○同・中

個展の作品が並べられたアトリエ空間。

入ってくる桜に柳田が従うように。

桜「ガラス固化体の作品ってどこですか？」

柳田「…（奥のドアを示す）」

奥の作業場が続くそのドアに、『OVER THE RAINBOW』  
と大きく描かれてある。

桜「虹の彼方に…」

柳田「…」

突然、傍らにあった金属製の棒を掴むと、次々にそ  
の場の作品を叩き壊し始める桜。

桜「虹の彼方の空高く 子守唄に聞いた国がある 虹の向こうの  
空青く 願った夢が叶う場所 星に祈って目覚めれば 悩みの  
雲はレモンの雫になって溶けている ぼくはそこへ行くんだ  
虹の彼方の青い空 幸せの青い小鳥が飛んでいる きっとぼく  
にも飛べるはず 飛べるかっ！」

砕け散っていく作品たち。

じっと、桜を見つめていた柳田が笑みを浮かべる。

桜、奥の扉に突進し開けようとすが鍵がかかっている。狂ったようにノブを引き続ける。桜の肩に手を置く柳田、鍵を開ける。

○同・奥の部屋

飛び込んでくる桜、作品と対峙する。  
金属棒を振りかぶる桜。

柳田「世界を終わらせよう」

桜「……」

桜の腕が震えている。  
嗚咽する：嗚咽が止まらない、桜。

○同・表

裏手の角。新聞紙などを丸めて置いたところに、朝雄がライターで火をつけようとしている。ライターの具合が悪いようでなかなか火がつかない。傍らでピーピーと鳴っているガイガーカウンター。火がつく。

朝雄「…（笑う）」

金属棒を持って走ってきた桜が、飛び掛かるようにして朝雄を殴りつける。  
身体を丸める朝雄。さらに殴りつける桜。転がるように走って逃げる朝雄。  
桜はそのままガイガーカウンターまで叩き壊し、上着を脱いで火を消し止める。  
傍らに柳田が立っ

柳田「…」

桜「…」

○未夢のアパート・表

朝雄が走ってくると、未夢の部屋のチャイムを鳴ら



す。ドアノブを引っ張る。ドアを叩く。

朝雄「引っ越すぞ！ 明日引っ越すぞ！ おい！ 明日引っ越すから！」

隣の部屋のドアが開き隣人が顔を出す。

隣人「あの…昼間っつーか、さっき、引越し屋来てましたけど」  
振り返る朝雄。頭から血を流し、しゃくりあげるように泣いている。

#### ○小さな小児科医院・診察室

遥を抱きかかえて医師の前に座っているいつか。

医師「いや…やっぱりこれは大きな病院に行ってちゃんと診てもらったほうがいいと思うんですね。聴こえなくなるとうのはいろんな要素があるわけで。ウチじゃあちよつとこれ以上お母さんの質問にはね、お答えできないというか」

いつか「…そうですか」

医師「というかこれ…最近いろんなところからうるさく言われているんであれなんですけど…お子さんちよつと身体に痣が多いというか…」

いつか「(笑って)この子やっぱり耳が悪いんで私が注意しても聞こえなくてしょつちゅういろんなとこにぶつかつちゃうんですよお」

#### ○同・受付

診察料を払っているいつか。

いつか「今日ちよつと急いでたんで保険証忘れちゃって」

事務員「はい、じゃあ今度いらつしやつたときで」

いつか「(診察室の方を気にしながら) はい必ず」

事務員「でも申し訳ないですけど今日はこちらになつちやうんですよね(と、請求書を出す)」

いつか「あ、はい(財布を出して)」

診察室から医師が顔を出しこちらを覗く。

いつか「(そちらを気にしながら、抱きかかえた遥に)今日はこれからおいしいもの食べに行こうねー」

○カラオケ屋・個室

いつかと遥がいて。

優樹「(ドアを開けて)お待たせしましたー。レモンチューハイと

ピラフとポテトフライです」

オーダーを並べる。

優樹「(笑って)お子さん、っすか」

いつか「なんだ子持ちのおばちゃんかよ、って顔した」

優樹「そんなことないっす」

いつか「した」

優樹「他になんか…」

いつか「セックスする？」

優樹「…は」

いつか「エッチしようか」

優樹「(ふ、と遥に目をやる)…」

いつか「大丈夫この子耳聴こえないから」

優樹「…」

優樹、遥の前にしゃがみ込むと、その目の前であや

すように手を振ったりする。

いつか「…私は(頭を抱える)」

優樹立ち上がり、少し会釈をして出て行く。

優樹「今日もちよっと忙しいんで、ネタ聞いてもらえないっすけ

ど。すみません…」

いつか「…(顔を上げる)」

扉が閉まる。

いつか「…」

遥がピラフを食べ始める。

いつか「あいつ、どんな漫才やるんだろうね…(遥に)あんたさ、

ホントに耳聴こえないんだよね。だって前は、テレビの

くだらない番組見てげらげら笑ってたじゃん…」

ピラフを食べている遥。

いつか「…聴こえてんでしょ…あんだ、ホントは全部聴こえてんでしょ…」

ゆっくりといつかの手が伸び…ピラフを食べる遥の髪に触れそうになって…そこで、止まる。

いつか「…」

○とある部屋

キッチンに凭れて座り込んでいる圭。

椅子に縛られたまま黙をかいて眠っている金子。

圭の指が何度も何度も携帯の発信ボタンを押す。

蛇口から洩れ滴る水滴。

○柳田の家

奥の作業場。

柳田が作品の完成に向かっていている。一心に。

額の汗。作品に触れる指先。

防護服を着た桜が柳田の仕事を刻み付けるように見つめている。

○カラオケ屋・個室

いつかがひとり、選曲している。

携帯が鳴る。

ディスプレイに同じ番号の着信記録が並んでいる。

○同・厨房

働いている優樹のところに朝雄が来る。

朝雄「同僚の店員を押し退けるように近づくと」あいつの実家行った」

優樹「え」

朝雄「あいつ実家に帰ってて」

優樹「…」

朝雄「やっぱり子ども生まれてた。ジジイが入るなとか言うから殴り倒して無理やり入ったら、奥の部屋であいつが泣き喚いててさ。ババアが警察に電話とかしようとするからそれも殴り倒して奥に行ったんだ。したら何だと思う？」

優樹「朝雄ケン…」

朝雄「あいつが包丁とか持ってガキ抱いててさ、近づいたらこの子殺してアタシも死ぬとかって」

優樹「…」

朝雄「やっぱりバカじゃん。あいつは死んでもいいけどガキ殺したらヤバいだろっつーの。捕まっちゃうし、あいつ」

優樹「で、どうしたの？」

朝雄「帰ってきた。5千円置いて。積み立ててんだ、将来のために。あ、ってか結局女か男か聞きそびれちゃった」

優樹「…」

朝雄「ちよっと腹減ったな」

と、優樹が作っていたオーダーのポテトを食べる。

優樹「…」

○同・個室

優樹「(ドアを開け) すみません」  
いつか「…？」

優樹の後ろに朝雄がいる。

○とある部屋

キッチンに座っている圭。

金子「…シヨンベン」

顔も上げない圭。

金子「だよな」

ズボンの中にそのまま放尿する金子。

金子「(少し笑い)…姉ちゃんとの一番いい思い出聞かせてくれよ」  
圭「…(顔を上げる)」

金子「なんかあんだろ」

圭「…」

金子「なかったら一番悪い思い出でもいいや…つか、なんかないのか、こう、語りたくなるような思い出」

言葉が出てこない圭。

金子「…じゃ作れ、これから。俺が作らせてやるよ」

圭「…」

金子「マジな話しようか。…これ、長引いてんだろ。ホントは俺攫ったら半日でカタがつく話なんだよ。それがこんなに長引いてるってことはやっぱりあのバカたちの思うようにはゼンゼンなってないっつーことだよ」

圭「…（金子を見る）」

金子「逆にもうあいづら殺されてるかもしんねえぞ。で、この場所がわかんなくて俺とお前だけ、なんか貧乏くじ引いてる、みたいな」

圭「…」

金子「もうやめようぜ、ばかばかしい。財布は抜かれたけど上着の内ポケットに十万入ってる。これやるよ。足んなきや後で渡してやる。携帯貸せ」

圭「…」

金子「お前も早く姉ちゃん捜したいんだろ」

圭「…」

立ち上がり、金子に近づくとロープを解き始める。

金子「お開きだ」

手のロープだけ解くと、サッと金子から離れる圭。

金子「用心深いじゃんかよ」

足のロープを解き、立ち上がる。

金子「（上着の内ポケットから十万円を取り出し）携帯と交換だ」

圭「…」

金子「そうか、それがなきや姉ちゃんに電話できねえよな、じゃあ一瞬貸せ」

と、札を床に置き少し離れる。

圭、用心深く近づき、札を拾う…その瞬間、金子が圭の頭めがけて椅子を振り下ろす。砕け散る椅子。

崩れる圭。

金子「俺にズボンションベンさせた奴許すわけねえだろ」

呻く圭のポケットから携帯を奪い、札を再びしましながら、

金子「姉ちゃん生きてたら俺が一発やっつてから売り飛ばしてやる

よ（と、携帯の番号を押し始め）…痛っ」

圭が金子の足に噛みついた。そのまま飛び掛かるように押し倒し金子の側頭部に頭突きを入れる圭、金子が落とした携帯に手を伸ばす。その手に金子が噛みつく。圭が蹴る。金子を蹴って引き離して立ち上がる。荒い息で金子を見下ろす圭。

携帯を握り締めた手首に金子の歯型。血が滲んで。

金子「お前はもう死んだ…（笑いだす）」

圭「…」

金子「H I V っつて知ってるか。俺、そうなんだよ。もうお前もな」

圭、床に落ちていたロープを掴むと笑っている金子の首に巻き一気に締め上げる。

圭「…」

金子の身体から力が抜ける。

立ち上がる圭、急いでキッチンの水道をひねって手首を洗う。進む水とともに、血が流れていく。

○カラオケ屋・個室

かなり酔った様子の朝雄。グラスを片手に、

朝雄「（うわ言のように）何台も…何十台もの車が流されていく…

車だけじゃない…家も…人も…ぐるぐるぐるぐる回っ

たりしながら…流されてく…俺の生まれたばっかの子

供も…何も縋るものがない…流されてく…」

やはりグラスを片手に、酔眼を朝雄に向けているいつか。

朝雄「（時折酒を含みながら）水を飲んだ…なんだかわからないものをいっぱい飲み込んだ…走って…走って…」

酒を、飲むいつか。

いつか「…空だよ」

朝雄「虹がでてたんだよっ!!」

その瞬間、朝雄がいつかに襲い掛かる。  
優樹、ポリウムを捨てる：大きな音量でリクエ  
ストした曲のイントロが始まり：朝雄はいつかの服  
を引き裂き、抵抗する身体を押さえつけ、足を拡  
げ：凌辱していく。

### ○柳田の家

『OVER THE RAINBOW』と描かれたドアが開き、防護  
服の桜と柳田が完成した作品を抱えて奥の作業場か  
ら出てくる。

そこに置いてあった、小ぶりだが頑丈そうなキャリ  
ーバッグにそれを丁寧に収納する柳田、そのまま、  
倒れ込むように簡易ベッドに横たわる。  
雨の音。

### ○いつかのアパート

雨の降っている音。

鍵が開けられ、いつかが戻ってくる。  
頭からずぶ濡れ。羽織った薄手のコートの下は、引  
き裂かれた服が絡みついていて。  
テーブルの下で、床に座り込んだ遥が絵を描いてい  
る。

いつか「…」

バッグもコートも投げつけて近づくと遥を殴る。殴  
る。泣きながら殴るいつか…。

蛇口から、ゆっくりと洩れ滴っている水滴。

### ○カラオケ屋・表

出てくる朝雄と優樹。

優樹「…」

通りの向うから、保護司の山口や数人の私服制服の警察が向かって来る。

優樹「朝雄ケン」

朝雄「ん、ってそこはツッコミどこじゃないだろ」

優樹「逃げろ」

と、朝雄を警官たちとは反対の方に押し飛ばし、自分  
は警官たちのほうに向かっていく。

警官たちも気づき走り寄ってくる。それに盾になる  
ように両手を広げる優樹。

優樹「逃げろ！」

朝雄「…」

我に返ったように逃げ始める。

優樹を投げ飛ばす警官、そのまま二人がかりで道路  
に頭を押し付ける。

優樹「朝雄逃げろ！」

残りの警察たちが朝雄を追いかける。すぐに捕まる  
朝雄。抑えつけられるが暴れ：

朝雄「ダメなんだって…俺にはガキがいたって…ガキには親父

が必要なんだよ…二人で育てんだよ…二人で育てなき  
やダメなんだよ…積み立てだって始めたし…ジャマす  
んなよ！」

んなよ！」

振り切って道路に飛び出す朝雄。

優樹「朝雄お！」

ドンッ、という鈍い音。

優樹「…」

車にはねられた朝雄が道路に転がっている。

## ○弁当屋

大釜で米を洗っているいつか。客の気配に振り返る。  
いつか「いらっしやいませ…」



そこに立っているのは、泰志。

泰志「久しぶり」

いつか「…あ…」

泰志「きつと会えると思ってた」

動けないいつか。

泰志「遥、ずいぶん痩せたね。って言うか、臭かったから着替え

させたら身体中痣だらけだった」

いつか「…」

泰志「大丈夫。やり直そう。大丈夫だよ。みんなで帰ろう」

いつか「…」

いつか、泰志から後退り、そのままの格好で店を飛び出す。

○道

走るいつか。

○いつかのアパート

鍵を開けて入ってくるいつか。

遥の姿を探す。

いつか「遥…遥！」

遥はいない。

部屋を飛び出す。

○別の道

走るいつか。

○さらに別の道

彷徨うように歩く圭。

携帯の発信を繰り返す。

その手首に巻かれた汚れたハンカチ。

○遥を探しながらいつかが走る。

通りの対岸に遥が歩いている。

いつか「…」

いつかが叫ぶ。

いつか「遥！」

遥が振り返って、いつかを見る。

いつか「…」

遥がいつかに向かって笑い、道路に飛び出す。

いつか「遥！」

車のクラクションと急停止音。

停止した車の直前の路上に、守るように遥を抱いたいつか。震えながら、泣きながら、遥を力一杯抱き締めていて。遥が小さな手を差し出す。握りしめていた手を開くとそこに僅かの小銭と小さな菓子。

○アパート

テーブルの脇の椅子に座った遥が、さきほどの菓子を食べている。

いつかはその傍らで煙草を喫いながら泰志にメールを打っていて：『さっきはごめんなさい。あまりに突然だったのでパニックになっちゃいました。もうちょっとでアパートに戻るので、迎えに来てもらえますか。遥と一緒に待っています』：メールを送信し終わると煙草を消し、キッチンにいくつか転がっていた空のペットボトルにストープ用の灯油を詰め始める。

携帯が鳴る。

泰志からの返信：『了解です。今からそちらに向かいます』…。

いつか「…（遥を見て微笑み）遥、お父さんが迎えに来るから、ひとりで待ってられるよね」

遥「うん」

いつか「…！」

○カラオケ屋・個室

いつかが大きなバッグを脇に置いて選曲している。  
扉を開けて若い店員が入ってくる。

店員「レモンチューハイとポテトフライお待たせしましたー」

いつか「…いつものヒトいないの？ 漫才やってる…」

店員「僕今日から入ったんでわかんないです。聞いてきますか？」

いつか「いや…いい」

店員「失礼します。…あ、えーっとなんか他の…」

いつか「もういいよ」

店員「失礼しましたー」

出て行く。

いつか「…」

大きなバッグを開け、さきほどのペットボトルを取り出していく。

ポケットの中の携帯が鳴る。

いつか「…」

取り出して、出る。

いつか「…はい」

○街の片隅

圭が携帯を耳に当てている。

圭「…姉ちゃん…」

○カラオケ屋・個室

いつかが微笑んでいる。

いつか「圭ちゃん…いつも電話くれてたの圭ちゃんだったんだね。

ごめんね、出なくて」

○柳田の家・表

警官がドアを叩いている。

警官「柳田さん、柳田さん」

○同・室内

簡易ベッドで柳田が死んでいる。

○街の片隅

圭が泣いている。

圭「姉ちゃん…会いたい…」

○カラオケ屋・個室

いつか「会おうね…ごめんね今まで…会おうね」

○街の片隅

圭「いつ会える？」

○カラオケ屋・個室

いつか「明日会おう」

○街の片隅

圭「どこへ行けば？」

○カラオケ屋・個室

いつか「〇〇線の××駅までこれる？」

○街の片隅

圭「明日には着ける。どこに行く？」

○カラオケ屋・個室

いつか「どこに行こうか」

○街の片隅

圭「どこに行こうか」

○カラオケ屋・個室

いつか「どこか遠くに行こう。二人で」

○街の片隅

圭「どっか遠くだね。二人で行くんだね」

○カラオケ屋・個室

いつか「明日行くんだよ」

○街の片隅

圭「明日だね」

○カラオケ屋・個室

いつか「明日会うんだよ。そしてどこか遠くに行くんだよ。…うん、じゃあ明日、姉ちゃんから電話するから…うん、じゃあ、明日」

電話を切る。カラオケの曲をセットする。ペットボトルの灯油を部屋中に撒く。イントロが始まる。ライターで火を放つ。マイクを持つ。歌い出す。

○××駅

柳田のキャリーバッグを引っ張って、桜が駅に入っていく。  
手首に真っ白な包帯を巻いた圭が、駅に入っていく。

○構内

桜のキャリーバッグに足を引っ掛けてしまう圭。  
倒れるバッグ。

○大きな、嘘のような虹が、駅舎の空にかかっている。

(了)

(別バージョン)

桜のキャリーバッグに足を引っ掛けてしまう圭。

桜「！気を付けてよ」

圭「すみません」

○ホーム

入ってきた列車に乗り込む桜。  
列車が走り去って：ベンチに座ったままの圭。

○大きな、嘘のような虹が、駅舎の空にかかっている。